

Web出願最新動向

紙の願書での出願に代わる画期的な方法として、Web出願が初めて日本の大学で導入されてから10年あまり。今、新たな局面を迎えているWeb出願について、各大学の取り組み状況とその効果をレポートする。

全国で1割強の私立大学が導入

2013年度入試においてインターネットを活用する出願(以下、Web出願)を導入する私立大学は、全国で1割強(ODKソリューションズ調べ)。まだその割合は大きいとはいえないが、これまで目立つ動きがなかったところに変化の兆しがある。地域別に導入状況を見ると、東海圏では2割を超えている。その盛り上がりが関西圏にも飛び火し、関西圏でも2割に迫る勢いだ。来年度は首都圏にも伝播すると予想されている。

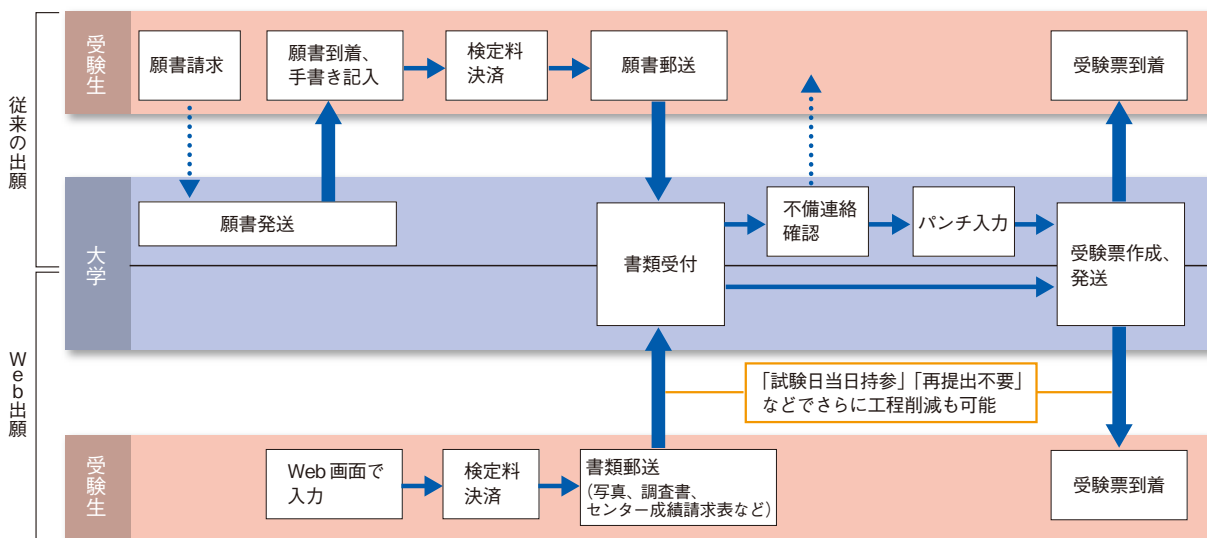
起爆剤となったのは、11年度入試で中京大学が導入した「Net割出願」だ(図2)。同大学では既に06年度からWeb出願に取り組んできたが、インターネットによる出願に限定して検定料を割引するという特典を付与したところ、例年10%程度だったWeb出願の利用者が当時約90%にまで急増し

た。それまで受験生に根強くあった「出願は紙の願書であるもの」という意識が変わった瞬間でもあった。こうした機運をとらえ、Web出願を導入する大学が今増えているのだ。

一方で、受験生とその家庭のデジタル環境の充実も背景にある。「リクルート高校生の価値意識調査2012」によると、高校生の家庭でのデジタル機器所有状況は「デスクトップPC」62%、「ノート型PC」75%。2つの回答を足すと100%を超え、いずれかのPCもしくは両方が所有されている家庭の多さを物語っている。また、パソコンのインターネットを「利用する」という高校生は95%。家庭にパソコンがあり、日常的に使いこなす高校生像が浮かび上がる。

浸透への下地は整い、未導入の大学にとっても無視できない存在となったWeb出願。そのメリットやデメリット、現状の課題など、導入大学への取材から探っていききたい。

図1 Web出願のフロー例



受験生の利便性がアップ

まず、各大学ではどのような狙いからWeb出願を導入しているのだろうか。今年度からWeb出願を導入した武蔵野大学、企画部入試センター事務課課長代理水野正勝氏は、第一の狙いとして「受験生の利便性の向上」をあげている。

Web出願では郵送による出願と比べ、受験生の手間と時間を要さないのが特徴だ(図1)。Web出願では、数日間を要する願書の取り寄せの必要がない。願書作成は画面上で直接入力するため、紙の場合のように訂正の不便さもなく、字のきれいさを気にしなくてすむ。記入ミスがあれば画面上でエラーチェックによりはじかれ、その場でわかるので、従来の願書再送といった心配がない。さらに、クレジットカードやネットバンクなど多様な決済方法を選べるだけでなく、検定料の振込前でも出願が可能など、よりスピーディに出願できる体制を整える大学も多い。ODKソリューションズの調べによると、実際に利用者の3分の1がクレジットカードやネットバンクなど自宅での決済方法を選択しているという。

従来の出願に対する高校生の不満を聞いてみると、「鉛筆で下書きして、自分だけでなく保護者と塾にチェックしてもらってから、ボールペンで清書。それを再度チェックしてから提出、という作業にフラストレーションがたまる」「願書が届く時期が最後の模試の大事な時期。とにかく勉強したかったので、書く時間がとられるのがもどかしかった」などがある。勉強の追い込み時期だからこそ、利便性の高いWeb出願は受験生にとって大きな魅力といえそう。

大学側の負担を軽減、環境保護にも貢献

Web出願導入の狙いとして、もう1つ水野氏があげるのは「紙の出願書類の削減」だ。郵送からインターネットによる出願に切り替えることで、願書の印刷および発送、出願書類のパンチ業務の委託などは不要となり、大幅なコスト削減が見込まれる。また大学側の作業負担の軽減も期待されている。入力画面上でエラーチェックができるので、紙の時にあった、郵便番号の記入もれや記入間違いなどの書類不備



「近大へは願書請求しないでください」というインパクトのある広告が話題を呼び、受験生だけでなく、Web出願の社会認知を広げた

について、受験生に電話で確認するといった作業が削減できるのだ。受験者数の多い大学では特に、経営上のコスト削減、作業負担の軽減へのインパクトは大きい。

また、紙の出願書類の削減は環境保護にもつながるとするのは近畿大学だ。同大学では、09年度入試からWeb出願を実施していたが、13年度から、紙の削減による地球環境保護を前面に打ち出した「近大エコ出願」へのリニューアルを図った。これは、地球環境に優しいエコロジーと、割引による受験生の経済的な負担を減らすエコノミーの、2つの「エコ」を目指す制度。入学センター事務長(取材時)世耕石弘氏はこう語る。

「昨年は13万部の願書セットを用意しましたが、これを積み上げるとスカイツリーの高さの3倍に相当します。このうち約3万部は使われることなく破棄されており、環境に関連する学科・専攻を複数もつ大学として、紙資源の節約が大きな課題でした。環境保護への参加意識と割引特典を生かしてインターネットへの移行を促し、近い将来にインターネット一元化を図りたいと考えています」

割引の有無で出願状況に大きな差

現在のところ、取材した導入大学では郵送とインターネットが併用されているが、各大学が最終的に目指すのは、Web出願のみのシンプルな運用だろう。それに向けていかにWeb出願利用率を高めていくかが課題だが、利用率を左右する最大の要素は検定料割引の有無だ。11年度入試に中

京大のみだったインターネット割引も、13年度入試では10大学が導入。その内容は、一出願あるいは同一試験日の出願あたり一律3000～5000円の割引、併願に対し割引を行うパックプランなど多様な例がある(図2)。

そんな割引による利用率への影響を具体的にみてみよう。近畿大学のWeb出願利用率は、割引がなかった時期は09年度6.52%、10年度3.08%、11年度2.89%、12年度3.40%と1割未満に留まっていた。それが、「エコ出願」を打ち出した13年度入試には約7割まで急伸。もちろん環境保護というメッセージに対する共感もあるだろうが、割引への反応の大きさもうかがえる。また、インターネット割引の先駆けである中京大学にいたっては、12年度時点での利用率が98%にも及んでいる。このほかでもインターネット割引を導入した大学での利用率は4～9割と高い。

一方、割引がない大学のWeb出願利用率は図2を見ても1割程度だ。割引のある大学に比べると低いのが、過去の推移からすると上昇トレンドにある。受験生の間でWeb出願の認知、浸透が進んだことで、割引の有無にかかわらず一定の利用が得られる点はおさえておきたい。

■ 志願者増、特に締め切り間際の出願で効果を発揮

13年度入試でWeb出願利用率を高めた大学のなかには、志願者数を大きく伸ばした例が少なくない。近畿大学の志願者数は前年比121%、京都産業大学では119%、武蔵野大学では115%だ。各大学は「日頃の広報活動を含めた施策の複合的な結果」とみているが、Web出願の影響も要因の1つと考えられる。

さらに特徴として、後期試験のように日程が遅い入試ほどWeb出願利用率が高まる傾向が、複数の大学で確認されている。京都産業大学を例にみると、公募推薦では69.6%、一般前期73.6%、一般後期74.8%と徐々に利用率が上がっている(図2)。一度Web出願を利用した受験生は次の出願でもインターネットを選ぶ傾向にあり、これに新たな利用者が加わっていると考えられる。

特に、3月入試などの緊急の対応が求められる入試においては、とりわけ効果的なようだ。象徴的な高校生のコメントがある。「記入ミスしたので、出願資料を請求し直したが、締切までに提出できるか不安だった。もし間に合わなかった

ら、志望校を変えていた」。このような締め切り間際で出願の際は、即日出願が可能なWeb出願が有効だろう。武蔵野大学の水野氏も、「従来であれば逃していた方も、この制度では出願頂けたと思われます」と手応えを感じている。

■ ■ 新たな問い合わせへの対策も必要

では、導入の狙いに対し、実際に大学側の状況はどうだったか、実施大学の現状を振り返ってみる。

まずコスト面では、「紙とインターネットの両方を運用する現時点ではまだコスト削減されていない」(武蔵野大学・水野氏)と、大きなメリットを感じるにはもう少し時間が必要だ。

また、作業負荷の軽減については、パンチ入力量の減少、誤記の減少に伴う確認作業の減少など、効果を実感する声があがっている。一方で、受験生からの新たな問い合わせ対応も発生している。普段あまりパソコンを操作しない受験生が出願するからか、パソコンの操作方法に関する問い合わせがあるという。ウェブ上には操作方法に関するガイダンスが掲載されており、きちんと読めば問題なく操作できるはずだ。しかし、クリックしていけば簡

単に進められる分、受験票が届いてから受験科目の選択ミスなどに気付くような例もあるという。ガイダンスをもう少しシンプルにして重要事項は見逃さないようにしたり、ミスに気付きやすい確認画面を作成するなど、Web出願ならではの工夫が求められているようだ。

■ ■ 今後は一部導入から拡大の傾向も

最後に、各大学のWeb出願の対象入試の範囲にはばらつきが見られることに気づかれた読者も多いように思う。スピード感を持って一気にWeb出願への切り替えを目指す場合は、全入試に一括で導入するケースが目立つ。一方で、例えば関西学院大学のように一部入試で導入し、様子を見ながら拡大していく大学も少なくない。各大学の方針に合わせて導入パターンも異なる。

13年度は一般入試とセンター入試を中心にWeb出願を導入した武蔵野大学では、来年度に向けAO入試、推薦入試への導入も検討。「大学院も含めて全入試制度でWeb出願を可能にしていきたい」(水野氏)と意欲的だ。すでに全体で導入している近畿大学では、早期のインターネット一元化を目指し、高校の進路指導研究会等にもWeb出願の状況を伝えて利用を働きかけていくという。

「大学生の就職活動においてインターネットのエントリーが瞬く間に一般化されましたが、大学入試においても同様の流れが考えられます。世界に目を向ければ既にWeb出願が標準的になっている国もあるなか、日本の大学を牽引していくつもりで、率先して取り組んでいきたいですね」(近畿大学・世耕氏)

受験生の間で手軽でスピーディなWeb出願が「できて当たり前」という状況も近いかもしれない。そうなれば、郵送のみの出願体制は志願数を鈍らせる原因になりうる。本誌制作中に、近畿大学は2014年度入試から出願の完全ネット化を発表した。東洋大学でも、昨年願書を約14万部刷っても、実際に紙願書を使っただけの出願は約2万部に過ぎないので、紙の願書と大学案内をやめて、出願から入学手続きまでを一貫して行えるWebサイトに全面移行するという。対応していないことがリスクとなる。そんな日が到来するかもしれない。



(藤崎雅子ライター)

図2 Web出願の取り組み例

導入年度	2001年度入試～	2003年度入試～	2006年度入試～	2007年度入試～		2009年度入試～	2013年度入試～	
大学名	京都産業大学	龍谷大学	中京大学	明星大学	関西学院大学	近畿大学	武蔵野大学	
近年の状況	2013年度入試から受験料割引のある「ネット割」を導入	2013年度入試から受験料割引を導入	2011年度入試から受験料割引のある「Net割出願」として本格スタート	導入以来、特に大きな変更なく継続	導入以来、特に大きな変更なく継続	2013年度入試から地球環境に優しく(エコロジー)受験生の経済的負担も減らす(エコノミー)「近大エコ出願」を開始	入試関連システムの更新時期に合わせて2013年度より導入	
2013年度入試	名称	京都産業大学ネット割	インターネット出願	中京大学Net割出願	インターネット出願	インターネット出願	近大エコ出願	インターネット出願
	対象入試(2013年度)	推薦 一般 センター利用	推薦 一般 センター利用	一般 センター利用	一般 センター利用	一般 センター利用	推薦 一般 センター利用	一般 センター利用
	受験料割引	1出願につき5000円割引。一般入試前期日程ではさらなる割引、バック価格を設定。	入試日程単位(同一出願期間)単位において、受験料総額から5000円割引	各方式1受験につき5000円割引。「3受験Pack」では通常7万円が2万5000円で受験可能で、さらに3受験Pack出願者に限り5000円(1受験あたり)で追加受験できる	なし	なし	①一般公募推薦、一般入試において1志願(3万5000円につき3000円割引、学内併願1志願(1万円) ②センター利用入試において2万円まで1出願のところ2出願まで可能(以降1併願につき3000円割引)※医学部を除く	複数同時出願するバックプランを設定。例えば、パーフェクトパック(全学部統一入試+メイン入試+センター利用A日程)では通常8万5000円のところ3万9000円となり4万6000円の割引
	Web出願割合(対象入試のみ)	①公募推薦入試69.6% ②一般前期73.6% ③一般後期74.8%	42.8%	98%程度	10%	8.5%	約7割	60%
	志願状況(全体)	4万883人(前年比119.0%)	4万8,133人(前年比102.1%)※外国人留学生入試は含まない	3万2,788人(前年比102.9%)	1万8,147人(前年比104.3%)	4万5,513人(前年比102.7%)	13万1,198人(前年比120.7%)	1万9,393人(前年比114.9%)